

に陸軍の工兵隊が川を渡してくれる。

二十年五月頃ハノイへいく。機関参謀今井平八郎少佐と通信隊があったのでこの警備につく。

昭和二十年八月十五日、少佐から重大ニュースがあるからと少佐の部屋で終戦の詔勅を聞き、皆号泣す。その後ハイホン警備隊へ少佐と共にハノイを去る。

中国軍の進駐、武装解除、中国軍の命にて機雷掃海に従事、翌二十一年四月アメリカ船で帰国。九里浜通信隊に上陸、帰郷する。

ポナペ島従軍記

鳥取県 菅井元吉

昭和十九年一月十五日、広島の子品港で仮装巡洋艦「赤城丸」に乗船、二十三時三十分護衛駆逐艦「涼月」「初月」とともに一路南方めざして出港した。

明くれば一月十六日、わが船団は「赤城丸」を中心とし、その前方右に「涼月」左に「初月」を護衛として豊

後水道を通過し危険海域に出た。

ちょうど正午まえ、突然異変がおきたようで甲板にしようとしたら誰かがおおごえで「できるな、邪魔だ、はい」とれ、「と叫んだ。船倉にはいったとたんドカンドカと砲声が聞こえた。

これはただごとではないぞと思っていると、我々のいる場所よりしたの方から盛んに爆雷をつりあげているのがみえた。やがて砲声は聞こえなくなった。これは敵の潜水艦に対する威嚇射撃であった。このときわが船団は敵潜水艦の魚雷攻撃を受けたのである。右前方にあった「涼月」に魚雷が二本命中、乗艦していたわが第四中隊は一瞬にして八十九人の兵員を失った。

「赤城丸」も魚雷を二本みまわれたが、見張りの海軍の下士官が魚雷の航跡を発見し、船はジグザク航路をとってからも魚雷をさけ、難をのがれることができた。

「涼月」は僚艦「初月」にえいこうされ「赤城丸」ともども引きかえして九州の佐伯湾に入港した。

佐伯湾で碇泊中、第四中隊の隊長以下生き残りの全員が「赤城丸」にうつり、「赤城丸」は錨をぬいて出港し、

瀬戸内海を東に進み、熊野灘をまわり、一路横須賀港に向かった。

横須賀港であらためて船団の編成があり、このたびは「赤城丸」のほか「愛国丸」「靖国丸」といった新鋭輸送船が行動を共にすることになった。

昭和十九年一月二十日横須賀を出港、房総半島の館山をみおさめに一路南下した。

船団は十日ばかり航海したところで、またまた敵潜水艦の魚雷攻撃をうけた。深夜突然砲声がかこえた。まえに豊後水道での出来ごとがあるのですぐにそれとわかり、救命胴衣をつけて待機した。しばらくするとどうやら危機を脱したらしく常態にもどった。

翌朝はやく甲板に出てみると、あたりに船影はなく「赤城丸」だけが走っていた。「靖国丸」は轟沈、「愛国丸」は逃げ去り、そのほかの船はどうしたのか分からなかった。

かくして「赤城丸」は翌々日一月三十日にやっとトラック島にたどりついた。

トラック島停泊中に我々の行き先はウエーキ島ではな

く、東カロリン群島のポナペ島だとわかった。

これまで一か月近く乗船して二度も危機にあい苦難をともにした「赤城丸」に別れをつけて、二月七日海軍の工作艦「秋津洲」にうつった。

出港準備も完了し、いよいよポナペ島に向かって東進し二月九日目指すポナペ島に到着した。

南洋群島にポナペという島があることは知らなかった。周囲がどのくらいあるかわからないが、高い山もあれば大きな川もあるかなり大きい島である。

明ければ早々我々は防空壕づくりにかかった。まずヤシ林のなかに「たこつぼ」と称する穴を掘った。毎日軽装でヤシ林に出かけていたが、二月十七日の作業中に空襲警報が鳴り、敵のB24による焼夷弾攻撃があり、コロニヤの町が全焼した。

翌朝はやく宿舍のあとに行ってみると持ち物は全部焼けてしまっていた。それからしばらくは着のみ着のままの耐乏生活がつづいた。

我々は、受け持ちの地区に移動することになり未開のジャングルを切り開いてはいった。焼けあとからトタン

板を持ってきて簡単な小屋をつくって住居とした。

さて、米軍の太平洋作戦はとびいし作戦となってきた。昭和十九年五月二日早朝から一日じゅう、米軍の空襲と艦砲射撃をうけた。敵は戦艦三、空母三、巡洋艦四、その他十五隻からなる有力な機動部隊で、常時滞空百機という攻撃である。しかし上陸作戦はとらず同夜北上した。これはポナペ島には相当多数の日本軍がいると敵は誤算し、犠牲が大きいことを考慮していっそくとびにサイパン、テナアンにほこさを向けたのである。

サイパン、テナアンが敵の手に落ちたため、ポナペ島は内地から船による連絡、補給がとぜつし、孤立におちいったポナペ島では自給態勢をとらざるをえなくなってきた。

まず白米は作戦用物資となり、主食はかんしょをもつて第一とするため、急いで開墾していもなえのうえつけをする事になり、各部隊は全力をあげて作業に突入した。しかしながらいかに南洋とはいえ、収穫までには数か月はかかるので、米食をストップしてからかんしょがとれるまでは実に困難をきわめた。

官給食ではかんしょのほかにキャッサバという熱帯植物の根にできるでんぷんのかたまりや、パンの実のふかしたものがあつた。ヤシの実のコブラはそのままでも食べられるし、コブラから食用油もとれた。

塩も自家製で、どこの部隊も海岸の近くに製塩所をもっていた。また各隊は漁撈班をつくっていて、空襲の合間に魚をとっていた。

艦砲射撃からそのごは、神経作戦というのか、毎夜敵機が飛んで来て爆弾をおとすので空襲警報になると、ごそごそ起きて暗闇のなかを防空壕に退避するといったぐあいだ、これには神経をつかわされてへいこうした。

敵の攻撃のしかたや使用する爆弾にもいろいろ変化があつた。我々が定期便といつたマーシャル群島プランから一機でとんでくる敵機が、毎日ほとんどおなじ時刻にやってきては、ポナペ島の飛行場に爆弾を投下し滑走路に大穴をあけて帰るので、これを毎日兵隊を使って穴うめ作業をした。ある時期には戦闘機がやってきて日本軍の陣地と派手な撃ち合いをするし、人間を見つけると機銃掃射をした。

爆弾と瞬発信管を使った時期もあった。これは木の葉にふれてもさく裂するので広い範囲に殺傷力があり、これでやられると山がはだかになってしまうほどのすごい威力があった。

ちやうどその頃、敵機が落としたというピラをみた。それは日本字で「帝国海軍いずれにありや」と書いてあった。さっするに、日本はもうだめだぞ、帝国海軍は姿をみせないではないかという意味で、我々の士気をくじく神経作戦であった。

こうして毎日のように敵の攻撃を受けながら、一方では自活の作業をどんどん進め、食糧の確保ができたが、栄養になる物がとぼしく栄養失調になる者が続出した。空襲と食糧の不足のため苦しい生活が続いたが、一方では楽しみもないわけではなかった。楽しみといえば島民のおどりや沖繩の人の軍隊慰問もそのひとつであった。

ポナペ島に限らず南方群島一帯は月の明るさが素晴らしい。明るい月のしたで哀調をおびた歌声にあわせておどる島民は夜のふけるのも知らないといわれていた。

昭和二十年になると終戦までポナペ島はたいした変化はなかった。

八月十五日の昼頃、兵隊がきて、終戦とかなって正午に天皇陛下がラジオで詔書をお読みになるといった。終戦とはなんだ、アメリカは負けたのかといった具合で、なにがなんだかわからない。本部に帰ってラジオ放送をきいた。雑音がひどくききとれないが、戦争がおわったということは間違いないようだ。日本は負けたのだ。内地の状況はどうだろうか。我々はどうなるのか。昨日まで敵機のこない日はなかったのに今日は朝からやって来ない。やはり戦争は終わったのだ。午後になって米軍機がとんできて、爆弾でなくて通信筒を落として去った。通信筒には米軍の命令が入れてあって山のうえに白旗をかかげよということであった。

翌日になると早速アメリカの駆逐艦がポナペ島の近くにやってきた。米軍機がとんできて、また通信筒を落とす。こんどはポナペ守備隊長に駆逐艦にやってこいという命令だった。八月十八日終戦処理のため米軍のポナペ進駐があり、日本軍の武装解除も実施された。

内地送還の第一陣が決定したときは嬉しかった。島に
いるあいだに内地からの便りを受けとったが、内地は食
糧難で大変な物価高だということだ。

さて、いよいよ内地帰還である。船は米海軍のLST
(上陸用舟艇母艦)である。一千屯あまりの船で前部に空
洞がある。ここに大勢の兵隊がすしづめになって二週間
ばかりかかって内地に帰ることになった。

昭和二十年十二月十七日、いよいよボナベともお別れ
だ。苦しい長い島の生活であった。

船が北に進むにつれて一日一日と気温もさがすが故国
日本に近づくのだ。裸でいられなくなって軍服を着る。
やがてしけになり船がだいぶ揺れはじめる。一時はおお
しけでSOSをだしたらしい。航海は十日間で、なつか
しい故国に帰ってきた。

十二月二十七日のことである。船足が止まる。近くを
通る小舟に聞いてみると浦賀だという。一日待って上陸
することになり、本船から小舟にうつり、それまで何年
間か我々の序列を示した階級章を将校以下全員とりはず
した。

浦賀に上陸して久里浜の收容所にはいった。收容所は
復員者で満員である。

翌日から復員事務にかかった。あいにく、航海中に風
邪をひき、上陸してから一層ひどくなったので、手拭で
鉢巻をしめ、ほとんど徹夜でとうとうかたづけ、大隊長
以下全員に俸給と旅費を渡し、よろこんで帰郷しても
らった。

そうしてあとから帰国した本隊の分も完了し、本隊の
連中と一緒に帰郷することができた。

皆と共に復員列車で出発した。
沿道にみる工場地帯の惨状には心が痛む。十二月三十
日の夜、やっと松江駅に着く。雪が降っている。荷物を
かついで駅を出たが、強制疎開で自分の帰る家がわから
ない。しかたがないので叔母の家に行くことにきめて歩
き出す。雪がさかんに降っている。